

Re:ビルド!!



生産キート
持ちだけど、
まったり
異世界生活を
満喫します

シンギョウ ガク
イラスト ネコメガネ

「試し読み版」

主な登場人物

ルシア・カバーサ

強力な魔力を持つ狐人族の美少女。好きな人にはすべてを捧げて尽くすタイプ。

ピヨちゃん

ルシアに懐いているコカトリスの子供。エッチなことをするとくちばしで突いてくる。

ハ子

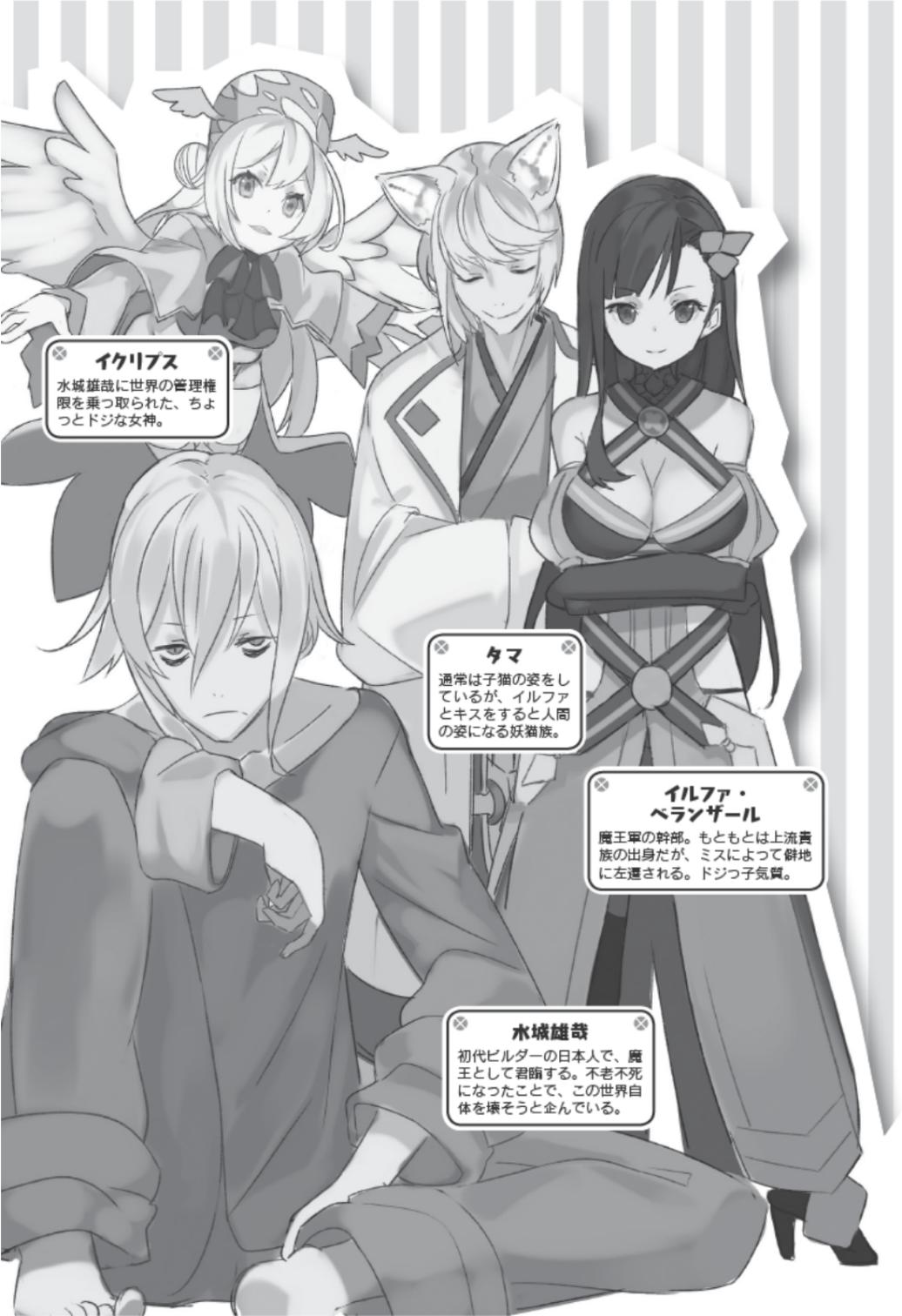
ヘルハウンド族の子供。フェンリル村のルリに一目惚れ。一途であまり深く考えない性格。

ルリ

フェンリル族の子供。ヘルハウンド村のハ子のが好き。芯が強く、落ち着いた性格。

村上創

対人スキルはゲームで磨いた、根っからのゲーマー。転生してビルダーとなる。慎重な性格で、地道な作業を厭わない普通の23歳。



イクリブス

水城雄哉に世界の管理権限を乗っ取られた、ちょっとドジな女神。

タマ

通常は子猫の姿をしているが、イルファとキスをすると人間の姿になる妖猫族。

イルファ・ベランゼール

魔王軍の幹部。もともとは上流貴族の出身だが、ミスによって僻地に左遷される。ドジっ子気質。

水城雄哉

初代ビルダーの日本人で、魔王として君臨する。不老不死になったことで、この世界自体を壊そうと企んでいる。

プロローグ

魔術の淡い光が薄暗く照らす神殿の中で、私は一人の男と対峙していた。

「ユウヤ……なんで私を裏切ったの……一緒にこの『クリエイト・ワールド』を作り変えていくと約束してくれたはずでしょ……それなのに……なぜ……」

目の前に立つ痩身の男は、ニヤリと顔を歪ませて笑っていた。私が女神の力を使って異世界から転生させ、この『クリエイト・ワールド』を繁栄させるために連れてきた男。物を創り出し、構造物を建てることに喜びを見出す、ビルダーという職種を体現する男でもあった。

「イクリプスよ、お前には確かにそういう約束をしたな。けど、それはお前が管理するためじゃなくて、オレ様が自由気ままに作り変えるためだ。無能なお前の下に、いつまでも俺がついていくれると思ってたのか？」

ユウヤは既に『クリエイト・ワールド』のさまざまな管理者権限機能を司る水晶球を支配下に置いており、私の扱える権限はなきに等しかった。

「私を騙したのね！ あれやこれや理由をつけて権限を委譲させたのは、この日のためだったんでしょ！」

ユウヤはフツと鼻で笑ったかと思うと、私から最後の管理者権限を司る水晶球を取り上げるため、パチンと指を鳴らした。すると水晶球は私の手を離れ、ユウヤの元へと飛んでいく。

「これで、お前に用はない。この『クリエイト・ワールド』から立ち去れ！」

水晶球をユウヤが手にしようとした瞬間、私は最後の力を振り絞って水晶球へ光弾を放つと、光弾が命中して水晶球は粉々に砕け散った。

「このアマっ！ ふざけやがって！ 大事な管理者権限をぶっ壊すとか何考えてるんだっ！」
「私を騙した罰よ。いずれ、貴方は別のビルダーによって滅ぼされることになるわ。せいぜいそれまで楽しむことね」

最後の力を使い果たしたことで、私は『クリエイト・ワールド』に実体を留めるのが困難となり、ユウヤの前から霧のように消え去っていった。

1章 崖の上のヒロイン

モニターに映し出されたイケメンのゲームキャラクターが、デカイ犬と狼に囲まれ襲われていた。俺は残業を終えて帰宅し、日付の変わる頃からすでに4時間ほどゲームに熱中しているのだ。

「だっはああっ!! 魔王城の敵がTRUEっす。なんだよ、この強さは。確かここは元神殿を魔王が改築して魔王城にした場所だったな。それにしても敵が強い。ヘルハウンドとフェンリルのコンビなんて誰が設置しやがった。うお、コカトリスまでいやがるぞ。石化やめてください。お願いしますから。石化やめて、らめえええ。お慈悲を、お慈悲を」

40インチのモニターに映し出されているのは、新作のビルドゲームである『クリエイト・ワールド』のゲーム画面であった。生産、建設、地形変更、魔物との戦闘、国造り、商売など何でも自由にできるといって売り出し文句で発売されたゲームを、俺、村上創むらかみつくむは絶賛攻略中だ。

大学を卒業して社会人になったことで、プレイ時間は格段に減ったが、この『クリエイト・ワールド』は、創り出すことが大好きな俺にとって久しぶりに大当たりのゲームである。なので、残業が続いて夜遅くアパートに帰ってきてても、若い体力に物を言わせてプレイするほどハ

マっていた。

「いやいや。ここでコカトリス急襲とかないでしょ。このゲーム、相当根性がひねくれた奴か、性格ブスなクリエイターが創り出したに違いないわー。仕方ない。今日中に魔王を攻略して、いろいろと解放したかったけど、回復アイテムも尽きたし、一旦拠点に戻るか。敵の湧かない場所に転移ゲートを設置して、サラバでござる」

キャラクターを拠点に帰還させると、そこは大きな都市のような場所になっていた。俺が寝る間を惜しんで作り上げた建物には、『クリエイト・ワールド』内のNPCたちが住み着き、すでに3000人規模の堂々たる大都市になっている。ここまで作り上げるのに、休みの日はもちろん、何日も徹夜をして、これまでプレイしたゲームの中でも最高傑作の都市が完成したわけだ。

「相変わらず、俺の作った都市は美しい。機能美、デザイン、防衛力の全てを兼ね備えた最高の都市……。こんなのを実際に作れたら嬉しいだろうな」

ゲームの中に作られた世界最高の都市をうっとりとして見ているのが、近頃の俺のマイブームであった。そんな楽しみに耽^{ふけ}っていると、急に心臓の辺りに痛みが走る。次第に息ができなくなり、そのまま意識が朦朧^{もうろう}としていった。

次に目を開いた時、そこには真つ白な空間があった。『クリエイト・ワールド』のキャラクター作成時に出てくる、全年齢作品には不似合いすぎるイケイケな女神様に似た女性が覗き込んでいる。

「残念なお知らせですが、貴方は無理がたたって若い身の上で過労死してしまいました。いい大人なら毎日夜遅くまで残業してから、ゲーム如きで徹夜なんてしないでですよ。貴方、頭の中は大丈夫ですか？」

目の前の女神様は顔立ちこそ綺麗に整っているが、その物言いはグサグサとド直球で心臓を撃ち抜く鋭さがある。絶対にこの女神様は性格ブスだろう。

「不幸な死に方をした貴方だけど、今回は特別に、そのほとぼる狂氣的なゲーム愛に免じて、ゲーム馬鹿の貴方が光り輝ける世界に生まれ変わらせてあげましょう。ゲームの世界、とりわけ貴方が先ほどまでやられていた『クリエイト・ワールド』を模した世界に転生して、思う存分に世界を構築されてはいかがですか？ 今、転生されると、なんと初回転生ボーナスで初心者大満足ツールが付いてくるお得なキャンペーン中です」

女神様は、どこかの怪しい通販番組のプレゼンターのように、胡散臭い笑顔で転生を勧めました。

「本当にあの『クリエイト・ワールド』に転生させてくれるの？ マジで？」

「はいっ！ 今なら初心者大満足ツール付きですっ！！ 今この時だけの大奉仕ですよっ！！」

「でも、お高いんでしょう？ それに初心者大満足ツールの中身が分からないし」

「いいえ、ご安心ください。今ならなんと、無料で転生できるのですっ！！ ハッキリ言って、赤字覚悟の大奉仕ですよ！ それに初心者大満足ツールとして、【ゴレム生成器】と【転移ゲート】を各一個ずつ付けちゃいますっ！ 今回限りの特別ご奉仕セットです。売り切れ必死ですよ」

「でも、万が一、転生に失敗とかあるんじゃないですか？」

「大丈夫！！ 超難関である天なる国^{ヘブンス}転生女神検定一級に合格したベテラン転生女神による転生ですので、スライム、ゾンビ、ゴレム、パンツなどには絶対に転生しない保証付きです。もちろん、何もできない赤ん坊なんていうのは論外です！」

「おー、それは素晴らしいですね。それだけの保証があるなら、ぜひ転生させてもらいたい」
女神様の胡散臭い口上に乗せられるように、転生することを簡単に選んでしまった。早まった気がしないでもないが、転生後に赤ん坊時代を過ごさなくていいという保証に惹かれていた。なぜなら、転生して大人の知識を持った俺が、転生先の母親におっぱいを飲ませてもらうのは、ある意味、犯罪級の所業であると思われるからだ。なので、転生してすぐに動ける身体は非常に魅力的な転生条件だ。

「承りました。村上創様、ご案内〜!!」

「へ!？」

軽い感じの口調で女神様が『ご案内』と言うと、身体がどんどん光の粒子になって消え去っていく。恐怖にかられて女神様の方を振り返ると、邪悪な笑みでこちらを見ていた。

「せいぜい頑張つて、魔王に殺されないように生き抜くことね。そうしたら、きつといいことがあるわよ。新米ビルダーのツクル君……ククク、アーハハアッハハ!!」

「騙したのかっ!! おい、転生キャンセルだっ! キャンセル!! ムぐうえううえう!!」

悪の組織の女幹部のような高笑いを上げている女神様を横目に見ながら、体中が光の粒子となったところで意識が途絶えた。



魔王城の最上階にある古の祭壇の間には、一人の男がいた。長く伸びた髪が目元を隠し、痩せこけた頬や不健康そうな色白い肌。絹の豪華な衣服から突き出した筋張った手足を豪華な椅子に沈め、目の前の祭壇に灯るイクリプスの神像群に捧げられた水晶球をぼんやりと眺めていた。

男の名は水城雄哉^{みずしろゆうや}。転生女神イクリプスによって最初に『クリエイト・ワールド』に転生させられ、この世界を創り出した男である。この地に転生した雄哉は、管理者として未熟であったイクリプスをうまく言いくめるめて、神としての力である管理者権限をいろいろな理由をつけて奪っていき、ついには、ほぼすべての機能を手中に収めた。

管理者の力で不死の生命を得ると、世界構築の仲間であった転生ビルダーたちを次々に討ち倒し、自ら魔王として君臨する。さらに、改造データを使って国を拡張、世界征服を成し遂げたのだった。

不死の魔王として世界を征服した雄哉は、悠久の時を使いながら世界を創り出すことに飽きてしまい、やがてこの世界を憎むようになった。その後、何度も人生を終わらせようと自殺を図ったが、不死となった身体はどのような状態からでも復活してしまう。雄哉は、世界の歪みを修復するのをやめて、世界が自壊する方にプログラムを弄り、世界ごと自分の存在を消そうと考えた。そのため、国の政務は適当な者に任せ、イクリプスが転生ビルダーを送り込んできた時のみ目覚め、そのビルダーを殺すと眠りにつくという生活を送っていたのだ。

イクリプスを模した神像の燈明^{とうみょう}の火がフツと点いた。

「イクリプスのババア……また性懲りもなく、この終わりかけた世界にビルダーを送り込みやがったか。オレ様が作ったこの狂った世界は、効率厨やデータ厨じゃクリアできねえ仕様にし

であるんだよ。ククク、今度のビルダーもすぐに捕捉してぶち殺してやる。こんなクソみてえな世界なんか早くぶっ壊れちまえばいい」

目の前の神像の燈明が点いたのを心の底から喜んでいる雄哉であった。不死の命を持って余っていた彼の興味は、久しぶりのビルダーがどれだけ生き残れるのかに注がれていた。

「どうせ、世界の歪みのメンテナンスをやめたこの世界の寿命は、あと少しだ。今回のビルダーがどこまでやれるか見極めてやろう。オレが死ぬまでの間のいい暇つぶしになってくれよ。ククク。アハハハハッ!!」

雄哉は自分が作った改造データ群により、この世界が崩壊の危機にあることを知っている。この世界に残された時間はあと一カ月ほど。その日がくれば致命的なバグが発生し、世界は全てなかったことになる。雄哉はボサボサの前髪を掻き上げると、ギラギラと血走った眼で神像を見つめて哄笑こうしょうしていた。



目覚めると、俺はそよ風の吹く草原のど真ん中で寝転がっていた。

女神様が保証したように赤ちゃんプレイを避けることはでき、転生前と同じように、ついさ

つきまでお世話になっていた自分の身体がそこにあった。顔もちろん、以前と同じように、うだつの上がらなそうな顔に違いない。ただ、衣服だけは西洋風のチュニックみたいなものになっており、下半身がスースーする。せめて、パンツだけは履かせてほしかったが、性格ブスの女神様は人の嫌がることをするのが趣味のようだ。

転生のシヨックも収まり、落ちついて辺りを見回すと、大きな木槌が1つ、そのそばに桃のような果物が3つ、お供え物のように置かれていた。

「完全にコレって『クリエイト・ワールド』のオープンニングと同じ状況じゃね……マジでゲームの世界に転生しちゃったのかよ……」

転生を悔やんでいてもしょうがないので、木槌を手にとると、装備画面が目の前に表示されていた。これも完全にゲームと同じ仕様となっており、空腹を紛らわすための食料である桃に似たものをインベントリにしまい込む。

▼ 木槌を入手しました。

▼ モモノ実を入手しました。

インベントリの中には、あの胡散臭い女神様が言っていた初心者大満足ツールである、【ゴ

レム生成器」と【転移ゲート】がしまい込まれていた。この2種類のアイテムは、序盤では絶対に手に入らないアイテムであり、建設や素材集めに役立つゴーレムを作り出せたり、通称『ドコデモゲート』と呼ばれるものによって設置した場所間の距離をゼロにしたりできる。これらを使えば、序盤からいろいろと楽ができるような気がする。とりあえず、少しだけ感謝しておこう。ありがたいことに、インベントリにしまい込んでおけば物の重量は加算されないように、その点は『クリエイト・ワールド』の仕様とは違っていた。

ゲームと同じであれば基本的に自給自足の生活ではあるが、自分の思い通りの世界が構築できるかもしれないという魅力の前には、転生イベントなど俺にとって通過儀礼に過ぎなかったのだ。

「確か、ゲームなら近くに寝泊まりできる拠点の小屋があつたはず……。まずはそこで、自給自足ができるように素材を集めることにしよう。今日から俺は、この世界の最強ビルダーになるっ！そして、ゲームで作った世界最高の都市を再現してやるんだっ！」

自分が望んだ世界に転生したのだから、この世界を徹底的にやり込み尽くすことにした。寿命はどれくらいあるのか知らないが、命ある限り、この世界を作り変えることに邁進するのだ。決意を新たにすると、足取り軽く、小屋があると思われる場所に向けて歩き出した。

30分ほど歩くと、ゲームで見覚えのあるポロポロの小屋が見えてきた。……やはり、この世

界は『クリエイイト・ワールド』を模した世界だと思われる。ボロボロの木でできた小屋の中には、煮炊きを使う【焚き火】がセットされていた。これはいろいろな食材を焼いたり、煮たりするのに重宝するもので、空腹を満たすための食事を作るのに大変重要なアイテムだ。とりあえず目的地に着いたので、ゲームと同じなのかをいろいろと試してみることにした。万が一、ゲームの仕様と違っていれば、引き籠りながらの異世界改造計画が頓挫してしまう可能性がある。だからだ。

「まずは重要物資の木材の調達だな。よし、あの木で試してみよう」

背中に背負った木槌で、青々と茂った大木をぶっ叩いてみた。ドンッ！ ずっしりとした手応えが木槌の柄に返ってきたが、木は何の変化も見せなかった。そういえば、木槌では2回叩かないと木を素材化できなかつたな。もう一発叩けばいいか。再度、木槌で木をぶっ叩く。

ドンッ！ ボフッ!!

木槌によって叩かれた木から白煙が上がり、木が消えると、薪のような形に変化した木材が地面にドロップされた。

「おお、変化した。これはゲームと同じだな。となると、地面は……」

木槌を地面に振り下ろす。ドンッドンッ！ ボフッ!!

白煙と共に土色の立方体が地面から飛び出し、叩いた部分が空洞化していた。

「マジで『クリエイイト・ワールド』と同じかよ。だったら、石も叩いてみるか」

さらに確認作業をするために、近くに飛び出ている拳大こぶたの石に木槌を振り下ろす。ドンドド
ンッ！ ボフッ！！

白煙が消え去ると、丸い石に変化して地面にドロップされていた。生成された3つの素材を
インベントリにしまい込む。

▽ 木材を入手しました。

▽ 土を入手しました。

▽ 石を入手しました。

素材が充足されたことで、ビルダーLVの低い序盤でもいろいろな物が作れるようになった
と思われる。チェックのために、ステータス画面を開いてみた。

ツクル 種族…人族 年齢…23歳 職業…ビルダー ランク…新人
LV 1

攻撃力…12 防御力…11 魔力…5 素早さ…7 賢さ…8

総攻撃力…22 総防御力…13 総魔力…5 総魔防…8

解放レシピ数…30

装備 右手…木槌(攻…+10) 左手…なし 上半身…布の服(防…+1) 下半身…布の

ズボン(防…+1) 腕…なし 頭…なし アクセサリー…なし アクセサリー…
2…なし

うむ、ドノーマルなビルダーでした。本当にありがとうございます。

チート能力があるかともか思った俺をぶん殴ってくれるステータスでした。でもまあ、ゲームの知識さえあればどうにかなると思われるので気にしないでおこう。手取り早く魔物を倒してLVを上げていくのもいいが、せっかくの転生なので、ゆっくりと地道に開発していくのも悪くない。風雨をしのぐ場所はあるから、まずは食料と水の自給体制の確立が緊急の課題だな。そのためには、まず魔物を狩って食材や素材を集めなければならない。武器が必要だ。

早速、武器を製造するための作業台を生成することにした。解放されたレシピ(アイテムに関する情報がまとめられたもの)の中から石の作業台を選択する。

【石の作業台】 ……石器武器・道具を製造可能。消費素材／石…7、木材…7

ポップアップで表示された素材を集めるために、小屋の近隣の石と木を木槌で叩き回っていく。集め終わると、素材が足りずに灰色だった【石の作業台】の表示文字が白く変わった。よし、これで作れる。ポップアップされた画面に意識を集中すると、ポフンツと白煙が上がり、小屋の前に石製のテーブルのような作業台が現れていた。

「やはり、ゲームと同じ仕様か……。ならば、序盤はウサギちゃんや牛ちゃん狩りだな。序盤の皮素材は貴重品だ。うまくすれば肉もゲットできるはず。そのためには、まず【石の剣】と【石の弓】を作らねば。あと【石の矢】もいるなあ」

必要な物が決まったので、素材の量を確かめるために各レシピを確認する。

【石の剣】	……攻撃力+20	付属効果…なし。	消費素材／石…5、棒…3
【石の弓】	……攻撃力+10	付属効果…なし。	消費素材／石…3、木材…2、つる草…1
【石の矢】	……攻撃力+5	付属効果…なし。	消費素材／石…1、棒…3

必要な素材を確認し終わると、小屋の近場を探索して素材集めに取りかかる。

【石】、【木材】は既に十分持っているのです、地面に落ちた枝を叩くと出る【棒】と、崖の近くに自生している【つる草】を入手した。そして、作業台で武器の製造を始める。

【石の作業台】の時と同じようにポップアップされた画面を意識すると、白煙が上がり、3種の武器が完成していた。ふむ。これで少し遠出ができるな。余った【木材】で木槌を大量に製造しておこう。消耗品だからたくさん持つておかないと、いざという時に叩いて素材化できないからな。準備を怠らずにやっておくべきだ。

木槌を製造していると、腹の方からクウウという音が鳴る。作業台製作から武器製造までを一気に行ったため、知らぬ間に空腹になっていたようだ。インベントリからモノ実を取り出して食べる。甘い果汁が口内を潤すと同時に、お腹が膨れていった。

「美味しいなあ……早いところ自給できるようにになりたいが……今のところは落ちている実を拾い集めるしかないか」

小屋の近隣を歩き回っていると、不意に人の声らしきものが崖の上から聞こえてきた。

「誰かあゝ！ 誰かいませんかあゝ！ 殺されそうなので助けてくださいー！」

助けてという割に、妙にゆったりとした若い女性の声でした。だが、助けてと言われて助けないわけにはいかなないので、土ブロックを崖にくっつけて階段を作成していき、一気に崖の上まで登っていく。声の主は黒い大きな帽子と、黒服をまとった若い女性だった。金色のウェーブがかかった髪が、少女らしい幼さを残す顔とのアンバランスさを際立たせて、不思議な魅力

を感じさせる。身長が低かったので幼い少女かと思ったが、黒服の胸の部分を押し上げている塊の大きさは、大人の女性に匹敵、いやそれ以上の隆起を見せていた。

これはフラグというやつだろうか？ この場面を華麗に乗り切り、女の子を救出すると、もれなくお付き合いできるという伝説の恋愛フラグというものか。だが、そんなイベントは『クリエイト・ワールド』では経験したことがない。

どうしようか逡巡しゅんじゆんしている間に、金髪の少女がゴブリンに取り囲まれていた。こちらの存在に気付いて、絶すぶるような目で助けを求めてくる。

「そこのお兄さん！ 頼みます！ 助けてくれませんか〜！」

可憐な少女に絶すぶるような眼で見られては、見殺しにするわけにもいかず、【石の剣】を手にして少女の周りを囲んでいたゴブリンたちを攻撃していく。ズバツ、ズバツ、ズバンツ！

我ながら見事な剣さばきでゴブリンたちを退治すると、倒されたゴブリンから【ゴブリンの骨】と【魔結晶】がドロップしていた。前者は序盤で重宝する簡易トラップ【落とし穴】が製造でき、後者は自立行動ができるゴーレムを製造できるようになる。ドロップ品にニマニマしている俺を見た少女は、あまりに手早く魔物を仕留めたからか、呆気に取られていた。

▽ゴブリンの骨を入手しました。

▽魔結晶を入手しました。

ドロップした骨と魔結晶をインベントリにしまいつつ、少女に話しかける。

「大丈夫？」

「助かりましたわ。うち、魔王様に命を狙われて本当に死んでしまうところだった……。ありがとう。本当にありがとうございます。ところで、お兄さんの名前は？」

妙にゆっくりした喋り方をすると思ったが、洋風な出で立ちの少女が使う言葉は不思議な魅力に溢れていた。

「創、村上創だよ。君の名前は？」

「う、うちはルシア・カバースと申します。本当にありがとうございます。レッツエンに住んでいたんですけど、おばあさんが亡くなってしまい、ちよつとした失敗をして街を追放されてしまったんです。行くあてもなく彷徨さまよっていたら、魔王軍に取り囲まれてしまって、殺されるかと思いました」

ルシアと名乗った少女は、頭に被っていた黒い帽子を取り、頭を下げてお礼をした。その頭にはモフモフの毛に覆われた尖り気味の三角の耳、通称、狐耳がピンと立って生えていた。自分が望んでいた異世界に転生したことで、気持ちが浮ついていたこともあり、つい魔が差



して一生懸命にお礼を言うルシアの狐耳を無断で揉んでしまった。

「あつ、そんなことはダメです。あふう、そんなに激しく揉まれたら、気持ちよくなつてしまいます。ああ、あうん」

狐耳を揉まれて身をよじらせるように喘ぐルシアの姿に、男としてグツとくるものがあつたが、助けた少女に襲いかかるのは道徳的に許されることではない。もう少しだけ悶えさせたかったが、これ以上は自分が犯罪者になつたような気がするので、ルシアの耳から手を放した。

「すまない。つい魔が差した。深い意図はないんだ。気を悪くしたら申し訳なかつたです」

少しだけ上気して顔を赤らめていたルシアが、翡翠色の美しい眼をパツチリと開き、上目遣いで呟いてくる。

「助けてくれたお兄さんなら、もう少しだけ触らせてあげてもよかつたんだけど……でも、女の子の耳は勝手に触っちゃダメですよ。うちはレッツエンの街からの追放者だし、魔王様から命を狙われている子だから問題はありせんけど」

ヤバイ。この子は最強にカワイイ！ こんな子に毎朝『お兄さん、朝ですよ。起きてください』とか起こされたら、マジ天国なんだけどっ！！ 転生前は、いつもスマホのアラームだけだったからなあ。せっかく異世界に転生したんだから、こんなカワイイ子に起こしてもraithたい。異世界で最初に出会った住人が、超絶にカワイイ狐娘だったことで、興奮を抑え切

れない自分がいた。

『クリエイト・ワールド』にも住民キャラこそいたものの、世界構築に処理パワーを取られていて、登場人物の3Dモデリングは最小限に抑えられていたのだ。この世界にルシアのように見目麗しい美少女が住んでいるのであれば、あのインチキ女神様に感謝の祈りを捧げてもいいかもしれない。ただ、超絶綺麗な狐娘さんが魔王に命を狙われているというのは、聞き捨てならない話だった。

「お兄さん？ まさか、うちが追放者だと知ってドン引きしてます〜？」

ピンと立っていた狐耳を伏せて、ルシアが不安そうな顔でこちらを見ている。

それにしても、カワイイっ!! ルシアたん、カワイイおお!! もう、あの小屋にお持ち帰りして、一日中、狐耳をモフリまくりてえええ!! いい年のおっさんが言うど犯罪臭がするけど、今の俺の正直な気持ちだ。脳内では、一日中、狐耳をモフられて、あられない姿になったルシアの妄想が膨らんでいく。

「お兄さん？ 聞いてます？ うち追放者で、魔王様に命を狙われているんですけど……」

あらぬ妄想をしていた俺の目の前に、急にルシアの綺麗な瞳が飛び込んできた。その眼に覗き込まれ、瞳に映った自分を見た時にふと我に返った。

「ひゃいっ!! 決してやましいことは考えてませんっ!! ルシアさんの狐耳は素敵ですっ!

以上、終わりっ！」

妄想に耽っていたところを、ルシアに覗き込まれて焦ったため、しどろもどろな回答をしていた。

クウウウウ……。一瞬の静寂が訪れて、誰かの腹の虫が鳴った。自分の腹が鳴った感覚はなかったので、鳴ったのはルシアのお腹だと思われる。

「恥ずかしい。お兄さんにお腹の音を聞かれました。うち、恥ずかしいわ」

「ル、ルシアさん、モモノ実でよければ差し上げますよ。今日のおかずは、これから手に入ればいいかと思うんでね」

お腹が空いているらしいルシアの目の前に、手持ちのモモノ実を差し出す。クウキュルル。俺が差し出したモモノ実を凝視していたルシアの腹が再び鳴った。

「うち、この3日間、ほとんど何も食べてないんです」

ルシアは差し出されたモモノ実を受け取ると、ものすごい勢いで食べ始めていた。

「ああ、美味しい。モモノ実がこんなに美味しいものとは思わなかったわ。料理人のおばあさんが言っていたけど、『空腹が最高の調味料』って本当だったんだ……。それにしてもお兄さん、食べているところをそんなに見つめられたら、恥ずかしいわ」

相当お腹が空いていたようで、一気にモモノ実を平らげたルシアが、口に付いた果肉を指で

取って大事そうに口に運んでいた。実にエッチな姿である。もう、完全にモンスター級のエロさである。ルシアがもつと食べたいと言えば、喜んで残りのモモノ実を差し出すだろうし、残りの食料も差し出してしまいかもしれない。完全にルシアの愛らしさとエロさに魅了され、何とか一緒に生活できないかと、黒い欲望の塊が自身を突き動かしていく。

崖の上で助けた狐耳の美少女に心を一瞬で奪われ、『ビルダー』として世界最高の都市を創造しようとしていた決意は、目の前の美少女とマッター暮らすのも悪くないという考えに傾き始めていた。

「ルシアさんはレッツェンからの追放者だと言っていたけど、住む所はあるの？ 生活はしていける？」

「お兄さん、この魔物が跋扈ばつこする世界で追放者というのは、死を宣告された者と同じです。うちは住む所もなければ、生活していく基盤もなくしてしまいましたから、あとはひたすらに死を待つ存在ですよ」

ルシアが急に元気をなくして地面に顔を伏せていた。彼女は追放者だと言っていたが、何の罪で街を追放されたのだろうか。

「追放者って、ルシアさんは街で何か悪いことしたの？」

「実は、うちが生まれた時から持っていた【建造物破壊】という魔術が魔王様の忌み嫌うもの

で、両親が王都から命を賭けて連れ出してくれたけど、うちをおばあさんに預けたあと、すぐに死んでしまったんです。それ以降はレッツエンの実力者だったおばあさんの所で、店の手伝いとかして暮らしてました。おばあさんが亡くなって店を畳むと、お金が必要になって……。

【建造物破壊】の魔術書を作ろうとしたら、暴走した魔術によって城壁をぶっ壊してしまっただです。それで、偉い人にすごく怒られて、死刑に等しい追放者にされてしまったんですよ。酷いと思いませんか？」

「城壁破壊ですか……追放されてもおかしくない……。建造物を破壊するのはとても悪いことなので」

ルシアには悪いが、物を作り上げるのに喜びを見出す『ビルダー』としては、建造物の破壊は追放されてもおかしくない罪だと思った。人様が作った物を破壊するのはいけないことだ。作った物を破壊されるのが一番頭にくる。だが、ルシアに限ってはカワイイから許す。カワイイは正義なのだ。もし、ルシアが俺の作った物を壊しても怒らない。今、そう決めた。

「ルシアさんの事情は分かりました。もし、行くあてがないなら、俺の所で住みませんか？ 早急に別の小屋を作りますんで、雨露をしのぐことぐらいはできますよ」

申し出を受けたルシアが、ウルウルと瞳に涙を溜めて上目遣いをしてくる。その姿は、俺のツボを突いてしまっていた。これはダメだ。強烈すぎる……もうルシアさんの言いなりになり

そうだ。可愛すぎる。

「お兄さん……本当に、本当に一緒に住んでいいんですか？ その……うち、けっこうご飯いっぱい食べちゃいますよ。こんなに街から外れた辺鄙な場所へんぴで、食料の調達とか大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫さ。俺は『ビルダー』だからね。大半の物は自作できるし、農地を開墾すれば食料も自給できる目処は立っているよ。しばらくは狩猟で獲る肉とモモノ実だけだね。ルシアさんが食いしん坊でもなんとかやっつけていきますよ」

「ツクル兄さんは『ビルダー』でしたか……ええっ!! 『ビルダー』!? 素材から物が自由に作り出せるという伝説の職業ですよね〜!？」

「伝説？ そうなの？ よく分からないけど、物を作り出す能力はあるよ」

そう言っつて、背中から木槌を取り出して地面を叩く。ドンツドンツ！ ポフツ！ 目の前に穴が開き、ルシアの前に土のブロックが生成される。

「すごい〜！ 本当に『ビルダー』って存在してたんですねえ……そ、それなら、安心してご厄介になれそうですわ〜。ツクル兄さん、不束者ふつかもものですが、今日からお世話になります〜。いろいろとお手伝いできることがあれば、うちに遠慮なく申し付けてください！」

ルシアがキッチンと正座して姿勢を直し、三つ指について頭を下げていた。頭を下げたルシア

の大きなおっぱいが腕によって行き場をなくし、より強調された格好になっている。ロシアたん……素晴らしい……ブラボー!! 見目麗しい狐娘だけでもサイコーなのに、おっぱいまでデカイだなんて……。ロシアたんを追放してくれた街の偉い人には勲章を贈らねば。

「あ、ああ。ロシアさんも困ったことがあれば遠慮せずに申し出てくれ。素材さえあれば、大半の物は作り出せるはずだからね」

「ツクル兄さん、素敵。頼りになるわ」

▽ 魔術師ロシアが仲間になりました。

急に目の前にポップアップ画面が現れ、ロシアが仲間になったことを表示した。

『クリエイト・ワールド』では、放浪者であるNPCを自らが作った街に招待して仲間にするシステムがあった。これによって街が成長していき、より多くの放浪者が集まると国となって、新たな国家を樹立できる仕様となっている。今回のポップアップ画面は、そのシステムが作動したものと思われた。ロシアたん、ゲットお!! これで一緒に行動することができるな。魔術師らしいけど、ステータスを見てみるか。

ルシア・カバーサ 種族：妖狐族 年齢：18歳 職業：魔術師 ランク：新人

LV2

攻撃力：8 防御力：9 魔力：20 素早さ：6 賢さ：18

総攻撃力：8 総防御力：12 総魔力：20 総魔防：18

使用魔術：**火炎の矢**（魔力：+10 火属性） **建造物破壊**（魔力：+??？ ??？属性）

装備 右手：なし 左手：なし 上半身：**追放者の服**（防：+1） 下半身：**追放者のズボ**

ン（防：+1） 腕：なし 頭：**追放者の帽子**（防：+1） アクセサリー：なし

アクセサリー2：なし

ルシアのステータスを確認すると、年齢は18歳だった。主に顔立ちが幼いのと、身長が低いのを除けば、納得の年齢だ。基本能力は素人に毛が生えた程度の能力だが、使用魔術欄に燦然と輝く【建造物破壊】の魔術が不穏さを感じさせる。だが、ルシアさんはカワイイのだ。きつと、魔術を放とうとしてズルツと転倒し、建造物を破壊しても怒ったりはしないだろう。心で血の涙を流しつつ、笑顔でルシアたんのほっぺをひっぱり、『痛い、ツクル兄さん、ごめんなさい』と言われたら許してしまうことは間違いなかった。



オレは、思わずうなり声を上げていた。魔王城の最上階にある寢室のモニターに映し出された輝点の位置を見て、イクリプスの送り込んだ新たなビルダーが、未開地域に近い無人地帯に転生していることが分かったからだ。さすがに、最果ての村を越えた無人地帯までは魔王軍を配置していなかった。

一番近くに駐屯する魔王軍の拠点は、ラストサン砦を統括するイルファ・ベランザール。彼女は竜人族という稀有な戦闘力を秘めた名門種族の一門に属していたため、側近として採用したが、何をやらせても失敗ばかり。ポンコツ認定して、窓際の名誉職に近いラストサン砦の守将のポストに左遷していた。

そのポンコツ貴族に一抹の不安を覚えながらも、通信結晶を使ってラストサン砦を呼び出した。数秒後、モニター上に映し出されたのは、ぱつと切り揃えられた前髪と、お尻まで垂れた長い黒髪が印象的な妙齢の女性。吊り目気味の赤い瞳で、恨みがましくギロリと睨んでいる。派手で露出度の高い服に包まれた身体つきは、男の眼を楽しませるようになっていたが、本人はそういった視線にさらされることを嫌っている様子だった。

「こ、これは魔王陛下。こんな遠く離れた辺境に打ち捨てられたアタシを呼び出して、何の用です?」

竜人族の女が舐めた口をきいてきたので、無言でギロリと睨みつけてやった。すると、オレからの視線を受けたイルファが驚いて身を震わせている。

「随分と舐めた口をきくようになったな。絶大な武力を誇る竜人族の一門とはいえ、舐めていと首をはねるぞ」

「ひっ!? こ、これは失礼いたしました。こ、今回はアタシに何用でしょうか? はっ! まさか、さらに僻地の勤務地に飛ばされるのですか? それだけにご勘弁を! この地ですら王都から数カ月もかかるのに、これ以上どこに行けと言われるので!」

イルファは自分がさらに僻地へ飛ばされるのを警戒しているようだが、ラストサン砦以上に僻地にある任地は他にない。イルファの心配は杞憂きゆうである。

「人の話を聞け。お前に一つ仕事をくれてやる。その仕事を首尾よく行えば、中央への返り咲きを考えてやらんこともない。お前もそんな辺境で一生を終わらたくないだろうが」

不機嫌そうだったイルファの顔に笑みが浮かんだ。こういった軽薄な行為がこの女の無能たる所以ゆえんなのだが、本人はそれに気付いていない。どうせ一度ポンコツ認定した使い捨ての人材なので、オレの口からそのことを伝えてやる必要はない。

「お前への仕事は『転生ビルダー』狩りだ。最近、お前の守備する近郊に転生ビルダーが現れた。そいつを捜し出して首を挙げれば、中央の軍司令官の職を与えて栄転させてやる。確実に首を挙げるのだ。分かったな」

「はっ、魔王陛下より賜りし依頼を、見事完遂してみせます。では、早速搜索へ入りたいと思います」

イルファは礼を失しているようで、慌ただしく通信を切った。オレ自身で転生ビルダーの首を挙げられればいいが、最近は魔王城の居室から出ることがないので、筋肉がやせ衰えており、動けるようになるまでは今しばらく時間がかかりそうだった。それに転生したビルダーの実力も未知数であるため、イルファの軍だけで事足りる可能性もある。そんなことを思いながら、手にしていた通信結晶をテーブルの上に放り投げた。



草原の中をルシアと歩いていると、目の前の草むらが不意に揺れて、ウサギの魔物が飛び出してきた。俺は咄嗟に石の剣を構える。

「ツクル兄さん、危ない〜！」

チッ。ルシアが放った魔術で作られた火炎の矢が、目の前のウサギの魔物を焼き尽くしていた。

「ふう〜。危ないところでしたなあ〜。不意を突かれなければ、ウサちゃんも案外簡単に狩れますね……」

主にこっちの身が危ない。君の放った魔術がかすった揉み上げが少しだけ焦げているのだよ。俺はルシアの魔術によって犠牲となり、チリチリに焦げてしまった揉み上げをさすっていた。

「あら、ツクル兄さん、揉み上げが焦げてしまつて……。ごめんなさい」

ルシアがチリチリになつた揉み上げを指でなぞつて謝罪してきた。ルシアさんのためなら、揉み上げの1つや2つは焦げてもオールオッケー、ノープロブレムだ。カワイイは正義。できることなら、謝罪の代わりにルシアさんの狐耳をモフりたいが、あまりやつて逃げられでもしたら、立ち直れないほどのダメージを負いそうなので、頭をポンポンするだけに留めておいた。「ルシアさんは意外と強いね。この角ウサギは序盤では結構強い敵なのだけど、一撃で燃やしちゃうなんてすごいよ」

俺は街を追放されたルシアを仲間に加え、さらなる食材の調達と素材収集を続けていたのだ。「そんなに褒められたら、照れてしまいます〜。魔術の発動体である杖があれば、もっと威力を出せるんですけどね〜。追放された時に財産といえる物は全部取り上げられてしまったから

……」

申し訳なさそうに、空の手を見ているルシアに不憫さを感じた俺は、ある提案を持ちかけてみた。

「そうだ。どうせならルシアさんの杖も作っちゃいましょう。確か、もう少し奥の森に行けば【^か樫の古木】をドロップする敵がいたはず。俺とルシアさんなら余裕で退治できますよ」

「本当？ 本当に【**樫の杖**】を作れるの？ 欲しいけど、うちはワガママを言ったらいけないし……」

「問題ないよ。食料と当座に必要な素材はだいぶ収集できたから、ルシアさんの杖を作ろうよ」
遠慮を見せるルシアの手を引き、目的の素材をドロップする【さまよう木】がいる霧の大森林へと歩き出していった。

霧の大森林は、その名の通り、常時霧に覆われた森林地帯だ。『通り抜けようとする者を間違った方向へ導いて森の中で遭難させ、木々の栄養にしている』とゲームの設定集には書かれていた記憶がある。確かにミルクのように濃密な霧が立ち込めており、隣にいるはずのルシアの顔さえも見えないほどであった。意外と霧が濃いな。ゲームの時はそれほど感じなかったが……。濃い霧に包み込まれたことで、はぐれないようにとルシアが腕を絡ませてきた。

「ツクル兄さん……何か霧が濃くて怖いです……一人にされたら怖いから、腕を放さないでく

れますか。本当に一人にされたら怖いわ」

ルシアは霧に包まれたことで不安を感じており、腕を絡ませただけではなく、身体も密着させる。ポヨン、ポヨン。歩く度にルシアの大きな胸の膨らみが、二の腕に至福の感触を伝えてきた。ああ、生きていてよかった。ルシアたん……サイコー。この感触があれば、あと10年は戦える。

「だ、大丈夫。ここも敵はそんなに強くないし、【檜の古木】を3つ手に入れたら小屋に帰から」

「ツクル兄さんにお任せします。うちをこの森に置いていかないで」

ルシアは不安そうな声音で、絡ませた腕にギュと力を込めた。カワイイ。今すぐに小屋にお持ち帰りして、ルシアたんの狐耳を猛烈にモフりたいっ！だが、お楽しみは取っておくべきだ。クールになれ。焦れば大魚を逃すことになる。クールに知的に、ルシアたんを攻略していくのだ。

「俺がルシアさんを置いていくわけがないでしょう。大丈夫、すぐに敵を退治してみせます

……ブホッ！

「きゃあっ！」

ルシアを励ましながら歩いていたら、突如として壁のような物にぶつかり、勢い余ってルシ

アと一緒に転倒してしまった。ふによん、ふによん。転倒したことで地面に身体をぶつけるかと思っただが、とても柔らかい物体が顔面を地面に強打する危機から救ってくれていた。心なしか、ドクドクと大きな鼓動が聞こえる。

「ツクル兄さん!? そんなところに顔を置かれたら、うちは恥ずかしくて死にそうになるんですけど。早く、顔をどけてもらえませんか?」

ルシアの肌からはいい匂いが発散していて、鼻孔から入った匂いが脳を揺さぶってくる。ああ……ずっと嗅いでいられるなあ……なんでこんないい匂いがするんだろう。

「ツクル兄さん! 敵が来ていますから! しっかりして!」

「ご、ごめんっ! 悪気はないんだっ! 事故だよ、事故。よ、よし。敵の攻撃は俺が引き受けるから、ルシアさんは魔術で援護してくれると助かる」

ルシアのおっぱいに埋もれていた顔を名残惜しく引き出すと、さまよう木に向かって石の剣で挑みかかっていく。

「外でこんなことをしたらダメですよ。お部屋の中でなら考えてもいいけど……でも、そんなことをしていいのは、ツクル兄さんだけだからね……」

最後の方はゴニョゴニョして聞き取れなかったが、部屋の中でならおっぱいの匂いを嗅いでいいと知覚した脳が、一気にアドレナリンを放出して猛烈なやる気を発揮する。

「うおおおおおっ!! ファイトー!! おっぱー!!」

ズビシュッ! さまよう木に当たった石の剣から、会心の一撃のような手ごたえが返ってくる。見事に身体を横に両断されたさまよう木が地面に倒れると、白煙が上がり、古臭いごつごつとした木材に早変わりした。

「本当にツクル兄さんは、本能に忠実な方だわ。男の方だからしょうがないのかしら……」
「ふうううううっ!!」

おっぱいのおかげで、アドレナリンが放出されまくっている。

1体のさまよう木を倒したことで、周りにいたさまよう木たちが一斉に動き出してこちらに向かってきた。

おっぱい、おっぱい、おっぱー!! いっ! ズビシュッ! ズビシュッ! ズビシュッ!
驚くべきアドレナリンパワーで3連続の会心の一撃が決まる。こちらに向かってきていたさまよう木たちは、なすすべなく素材にされてしまった。

「あら、このままだと、うちの出番はなさそうな気がしますね……魔力を温存できて嬉しいですけど」

「ふう、ふう……ざっとこんなものさっ! 大丈夫って言ったでしょ。さあ、早く【樞の古木】を拾って……」

ドロップ品の【檜の古木】を拾おうとしたら、身体が光に包まれた。

▽LVアップしました。

レベルアップしたことで、能力値が少し上昇していた。

LV1↓2

攻撃力…12↓16 防御力…11↓15 魔力…5↓7 素早さ…7↓9 賢さ…8↓10

「おめでとうございます。ツクル兄さんがレベルアップしたんで、今日はお祝いしないとう。そうだ、今日だけ特別に一緒に添い寝してあげましょうか？」

唐突なルシアの申し出に、アドレナリン中毒になりかけていた脳がパニックを起こす。ふあっ!? そ、添い寝だと。ど、どどどしようっ! 心の準備があ! ルシアの発言により一気に挙動不審者になった。完全に動揺を表に出してしまっている。慌てるな、俺! 冷静に! クールな大人の対応をするんだ。『フッ、ルシアさんにはまだちょっと早いよ』と気障なセリフで軽く受け流すのが大人の男。

「ぜ、ぜひ、ど、どど、同衾どうきんしていただけるとありがたいっ！」

口が、脳からの指令に反逆した。しかも、ドモったうえに、なぜか武士言葉という醜態つきだ。ロシアも冗談で言ったらしく、こちらが本気に取るとは思っていなかったようだ。おかげで2人して顔を真っ赤にして硬直している。先に硬直を解いたのはロシアの方で、耳元に近くと囁ささやくような声で言った。

「ツクル兄さん……うちと同衾するのは、もう少しお互いを知ってからにしましょう。うちもツクル兄さんのことは嫌いじゃありません。もう少しだけ時間をくれるとありがたいの……」
ロシアのカワイイお願いで頭のネジが吹き飛び、煙が噴き出してオーバーヒートしてしまっ
た。

霧の大森林では、ロシアに心があつちりと驚掴みにされてメロメロになってしまったが、何とか無事に拠点となる小屋まで帰ってくる事ができた。ロシアも自分の言ったことが、結構恥ずかしかつたと理解したようで、帰りの道のりはちよつとだけ距離が開いていたが、チラチラとこちらに視線を向けることが多かった。

……これは、俺が耐えられねえかもしれんな。出会って1日で朝チュンまで済ませてしまつては、全国1000万のロシアたんファンに申し訳が立たない。ここは、男として意地を貫き

通して、断固朝チュンは回避せねば。

「ここがツクル兄さんのお家ですか？　こんな僻地によく一人で住んでいますね。夜は魔物が襲ってきませんか？」

ルシアは崖を背に立っている掘つ立て小屋を見て、心配そうな顔をした。ゲームでは、夜になると魔物の活動が活発になり、自分が作った街に押し寄せてくることもある。ルシアがそういった敵の存在を気にしているということは、この世界でも同じようなことが繰り返られているのだろう。

「大丈夫。とりあえず今から防壁作るから、ルシアさんは小屋の中の焚き火で【石鍋】を使ってウサギ肉を焼いてもらっていいかい？　料理できるよね？」

「調味料がないから、そこまで美味しい物は作れませんが……焼くくらいはできますよ」
「大丈夫！　【塩】は今から生成するよ」

素材収集中に岩塩らしき岩肌を見つけて、木槌で岩塩ブロックを手に入れていた。その岩塩ブロックを木槌でもう一度叩く。

▽ 岩塩ブロックを精製しますか？　YES / NO

『YES』を選択する。ポフツ！ 地面にあつた岩塩ブロックが消えると、布袋に入った塩が飛び出してきた。確認のため、袋の中の白い粉を舐めてみる。間違つて違う白い粉だと非常に困るので、味見だけはしておいた。しょっぱー。うん、これはちゃんとした塩だ。問題なし。ビルダーの塩の生成を見たルシアが、ぼかんとした顔でこちらを見ている。目の前で手を上下に振つたが、ピクリともまぶたが動かなかつた。

あれ？ この世界って、こうやって物を生産するのが基本じゃないの？ まさか、特殊な生産方法だったとか……。

「あ、あのう……ルシアさん……おーい、ルシアさん。帰ってきてー」

「はくうんっ！ しょっぱー。いったいどうなっているんですか？ 白いブロックが【塩】に変わるなんて。こんなの初めて見せてもらったわー。ツクル兄さんが、大丈夫って言つた意味がよく分かつた。本当にすごいわー」

目をぼちくりさせて帰ってきたルシアが、精製された塩を手にとって味見をしていた。

「もしかして、この方法ってビルダーだけの特殊な生産方法だった？」

気になってしまったので、街に住んでいたことのあるルシアに尋ねた。

「そうですね。普通は岩塩を切り出したあとの塊を金槌と金床で細かく砕いて使うのが一般的ですよ。こんな方法で短時間に精製されることなんてありません。やはりビルダーの力はす

「ごいすねえ〜」

ルシアはビルダーの力を持つ俺に尊敬の視線を向けてきた。ルシアの反応を見て、この世界におけるビルダーはチートな職業なのかもしれないと少しだけ思ってしまった。となると、この転生はかなりお買い得だったかもしれない。好きなゲームの世界で自由に世界を創造する力を得て、カワイイ狐娘の同居人まで用意してくれたのだから。

「そうか……。ありがとう、勉強になった」

「あれ、ツクル兄さんは街に行かれたことないんですか？ 今までここに一人で暮らしていたんですか？」

ルシアの質問に自分が転生者だと明かしていいのか、判断に迷ってしまった。転生してこの地にいることを伝えれば、狂人と思われるルシアが逃げ出してしまうかもしれないからだ。咄嗟に言い訳を考える。

「あー、実は一部の記憶が欠落してしまっていてね。この世界の常識が分からなくなってしまうのさ。ルシアさんと出会った時に不用意に狐耳を揉んでしまったのは、そういう理由があったからなんだよ」

この世界における常識的なことが分からない理由を、記憶の一部が欠落していることにして、ついでに、出会った時にルシアに行った破廉恥行為の言い訳を考え出した。マジで俺は天才か

もしれない。これで、ルシアさんは俺に疑いを持たないはず。そうなれば、ルシアさんとの同棲ウハウハ生活が始まるのだ。妄想に耽っていたら頬にひんやりとした感触を感じた。ルシアが両手を当ててこちらを心配そうに覗き込んでいた。

「本当に記憶の一部がないのですか？ それはとても大変なことですよ。うちにできることがあれば、なんでも申し付けてください。うちはツクル兄さんの同居人になるんですからね」

心配そうに見つめるルシアの翡翠色の瞳は少しウルウルと潤んでいて、本当に心配してくれているようだった。はうううぐうう!! ごめんよ! ごめんよ! ルシアさんに転生者だって打ち明けられなくて、ごめんっ!! 絶対にいつか必ず本当のことを伝えるから……。今はごめん……。本気で心配してくれているルシアに心の中で謝っていた。

「ありがとう、助かるよ。さて、【塩】も用意できたし、ルシアさんには夕食の支度を任せよう。俺は夜までに魔物用の防壁を作るから」

「はい、任せてください。腕によりをかけた夕食を作りますね」

インベントリから出した狩猟成果のウサギ肉と食用キノコをルシアに渡すと、彼女は鼻歌を歌いながら小屋の中にある焚き火を使い、石鍋で調理を始めた。料理を始めたルシアからすぐに【石包丁】が欲しいと言われたので、生成して渡してあげると、気分よく調理に戻っていった。

夕食ができるまでの間、夜間に魔物に侵入されないように、小屋の周囲40mほどを平らにし、一辺が1mある土のブロックを3段重ねて、3mの土の防壁を築く。防壁の外側には幅2m、深さ5mの溝を掘っている。この溝には、あとで水を入れて水堀にする予定だ。

最後に、出入り口の扉を生成する。石の作業台で生成できる扉があるかどうかを調べると、木製の扉があった。

【木製の扉】……木材を補強してできた扉。耐久値…120。消費素材／木材…10、石…10、つる草…10

かなりの素材を消費するが、出入り口がないと、素材収集などで出かける際にいちいち防壁を壊すことになってしまう。その手間を考えれば、作っておいて損はない。木槌で叩くと、高さ2m、幅2mの幅の木製の扉が現れた。重さは感じないので、片手で持つて出入り口用の空間にはめ込む。ピツタリと隙間が埋まり、扉の開閉ができるようになった。

あとは、初心者大満足ツールで入手したゴーレム生成器を小屋の近くに設置し、手に入れた魔結晶と木材を使用して、素材収集用の自立型ゴーレムを数体製造した。使用した魔結晶がゴブリンの物であったので、それほど強くないが、この辺りの魔物には簡単には撃破されないく

らしい耐久性を持ち合わせている。また、周囲の指定したアイテム素材を収集するように設定してあった。序盤でこのような楽ができる、最初期のしんどい収集作業を省略できるので、あの性格ブスの女神様にしてはいい仕事をしてくれた。

「よしっ！ 今日の作業はここまでにしておこう。まあまあのできだな」

製造した木製ゴーレムたちを素材収集に送り出すと、小屋からルシアが出てきて夕食が完成したことを伝えにきた。

「あらまあ！ ツクル兄さん、ちょっとした間に立派な物を作りましたね」

完成した土の防壁を見たルシアは、驚きの声を上げていた。

「これぐらいしっかりしたものを作っておけば、この辺りの魔物は近寄れないからね。明日は、水場から水を引っ張る水路を作る予定だよ」

「ツクル兄さんは働き者ですね。じゃあ、明日の英気を養うために、今日の夕食はいっぱい食べてもらわないと。うちも腕によりをかけて作りましたからね。美味しく食べてくれると嬉しいわあ」

ウキウキした顔でこちらを見ていたルシアの頭をポンポンと撫でてやる。セリフが新婚妻のそれと同じであった。水場の設置ができたなら、ルシアに綺麗な服を作るための道具と素材収集に行くかな。エプロンドレスなんか着て、さっきのセリフを言われたら、辛抱たまらんなあ

……。

「ツクル兄さん？　どうかされました？　なんか真剣に考え込んでいるみたいですけど？」

「あああ、何でもないよ。ルシアの調理していた匂いでお腹が鳴っていたところさ。楽しみだな」

ルシアが俺の手を引き、小屋に向かって2人で歩き出した。

小屋に戻ると、ルシアの作った夕食がテーブルに並んでいた。ウサギ肉と食用キノコを塩で煮込んだ簡単な料理だったが、作ってくれたルシアの愛情がタツプリと注がれているため、転生前に食べていた食事の数倍は美味しく感じる。

「調味料が揃えば、もっと美味しく調理できますけど……。今はこれが限界ですよ」

食いしん坊だと言っていたルシアは、小さい身体のどこに収まるのか分からないほどの量を食べていた。それを見ていたこちらの様子に気付き、恥ずかしそうに上目遣いで言う。

「そんなにじっと見られると恥ずかしいです。ツクル兄さん、あんまり見ないでください。うちのご飯食べるところなんて、見てもしょがないですよお？」

「いやあ、どれだけでも見ていられるね。ルシアさんは綺麗な食べ方をするから、見ているこっちが楽しくなってくるよ」

応急で作った箸を上手に使って、ルシアは煮込み料理を食べている。熱いためか、フーフー

と冷ましてから食べているが、その冷ました料理をアーンしてくれたらいいなと思いつつ見ている。

「うちはすっかり食べていたら、ツクル兄さんの分がなくなってしまいうから、食べさせてあげましょうか？ アーンしてくれませんか？」

「アーン」

ジツとルシアの食べるところを見ていたら、急にフーフーしたウサギ肉を口元に持ってきてくれた。差し出されたウサギ肉を口の中に入れる。口に入ったウサギ肉は自分で食べた時の数倍は美味しく、とろけそうだった。

「美味しいよ。ルシアさんの料理は最高だ。美味しい。人生の中で一番美味しい！」

「喜んでもらえてよかった。明日からの料理当番は全部うちが担当しますわ」

「ああ、あの食材でこれだけ美味しい料理を作ってくれるなら、ぜひお願いしたいね。俺が作ると何か味気ない料理ができそうだし。ルシアさんの手料理なら何でも食べられるよ」

「もう、照れてしまいます。ツクル兄さんは、うちのことを褒め過ぎですよ」

ルシアは褒められたのが恥ずかしいのか、俺のお腹の辺りをポコポコと軽く叩いて照れていた。その姿にズキユンと心臓を撃ち抜かれてしまう。萌えるう……萌えてしまいう。ルシアたん……マジ天使。俺、このまま昇天しちゃうかもしれない……。



ポンポンとお腹を叩かれる度に、小柄なルシアの身体をギュッと抱きしめたくなる衝動を抑えるのに苦労していた。はうううう、ルシアたん。なんという、可愛らしさ……。

「ごめん、ちょっと外の空気を吸ってくるわ。ついでに俺の寝る場所も作ってくる。ルシアさんはこの小屋を使っいいいよ」

「へ!? ツクル兄さんは、この小屋で寝てくれないのですか? 街を追放されてから、怖くて一人では眠れないんですっ! 添い寝はダメだけど、近くで寝てくれないんですか?」

俺のお腹をポコポコ叩いていたルシアが急に抱きついてきた。少しだけ、フルフルと身体を震わせている。

「うち一人で寝るのは、怖くて怖くてたまらないんです! 誰とも喋らないで、一人寂しく魔物に怯えて寝るのは、もう嫌! ツクル兄さん、ワガママなうちの願いを聞いてくれませんか?」

腰にギュッと抱きついてきたルシアが、不安げな顔で見上げていた。その翡翠色の瞳の奥に恐怖と孤独を感じ取ったことで、ルシアのお願いを拒絶することができなくなってしまった。俺は抱きついていてルシアの頭をワシヤワシヤと撫でてやる。

「承りました。ルシアさんの安眠は俺が守ることにしよう。だから、ルシアさんは俺に美味しいご飯を提供してくれるとありがたい。助け合いの精神でいこう」

「ふええええっ!! ツクル兄さんが優しい人でよかったあ。こんなにワガママなうちを許してくれるなんて……」

追放されて何日間彷徨ったのか分からないが、灯りのない夜の暗闇はルシアに魔物の恐怖と孤独の辛さを植え付けたのだろう。俺のように今日会ったばかりの男にすら、抱きついて離れないというのは、相当にトラウマを抱えているに違いない。恐怖と孤独に怯えるルシアを見てしまったら、やましい気持ちは一切消え去り、純粋に彼女の安眠を守ってやりたいという欲求の方が強くなった。

「よし。添い寝はできないけど、ルシアさんが寝るまではこのまま一緒にいてあげるよ。安心して眠っていいよ。俺が絶対にルシアさんを守ってみせるからさ」

「ツクル兄さん……うちが起きてもこの小屋からいなくなっていますよね?」

「ああ、大丈夫。ルシアさんさえよければずっと一緒にいていいよ」

「本当に?」

「本当さ。俺は多分嘘つかない」

「多分って何ですかそれ。ちゃんと約束してください。それと、うちのことはルシアと呼び捨てにしてくださいよ。さん付けは他人行儀に聞こえます。同居人なら家族も同然ですよね?」

「ああ、分かった。約束するよ。俺はルシアとずっと一緒にいるよ」

「本当に……ツクル兄さんは……すう、すう、すう」

夕食を食べてお腹が膨れ、屋根のある場所で寝られることに安堵したのか、ルシアは俺の腰にしがみついたまま寝落ちしてしまった。多分、1週間以上はまともな睡眠が取れていなかったものと思われる。早いところ寝具も作らないとな。まだ暖かいとはいえ、この格好で寝ていたら、いつ風邪を引くか分からない。大事なルシアが風邪でも引いたら……。

とりあえず、明日からの水路開削を終えたら、農園整備と鉤石掘りができる道具も揃えないと。男としてMY同居人を苦勞させるわけにはいかないからな。そんなことを考えているうちに、俺も初日の疲れが重なって倒れ込むように意識を失っていった。



鬱蒼うつそうと茂った木や腰下ほどある下草が、私の周りを覆いつくしていた。周囲を見回してみるものの、人が通った形跡は全くない。人跡未踏とはこういった場所のことかもしれない。

目的の場所に到着したため、通信結晶を使い搜索本部へ連絡を入れる。

「これより第32搜索隊はHフィールドの搜索を開始する。魔王様に栄光あれ！」

私は砦に駐留していたゴブリンやコボルトを数体引き連れて、南に広がる霧の大森林を抜け

て、無人地帯と呼ばれている地域を駆けずり回っていた。こんなクソみたいな仕事でも、キチンとこなせば昇進できるらしいと砦の司令官が言っていたので、辺境生活を脱するために死にもの狂いで転生ビルダーと思^{おぼ}しき者を搜索していたのだ。

だが、ここ数日間、搜索を続けているが、転生ビルダーが製作したと思われる建造物は見つかっていない。すでに時刻は真夜中に差しかかっているため、ゴブリンやコボルトたちは疲労を理由に、私の指示に反抗する気配を見せ始めている。そこで、野営の準備を始めさせていた時にソレ^{人形}は私たちの前に現れた。ソレは木でできた人形のようなだったが、手には石製の剣を持ち、顔に当たる部分にある一つ目が赤い光を宿していた。その異形の姿にゾツとする感じを受けたが、剣を構えたまま動こうとはしないので、様子を見ることにした。しかし、それは私の判断ミスであったことを思い知る。一つ目を明滅させた木の木偶^で人形はありえないスピードで動くと、油断して座り込んでいたゴブリンの首を一発で斬り飛ばした。そして、息つく暇もなく、返す刀で動けずにいたコボルトの首も掻き切つて絶命させる。一瞬にして2名の兵士を葬った木の木偶人形は、こちらに向き直ると、不気味な一つ目を明滅させていた。木偶人形がこちらに向かって走り寄ってくるのを視認したため、剣を抜いて防^ごうとしたが、背後より別の木偶人形に貫かれ、私の命はここで尽きることとなった。

Re:ビルド



生産キート
持ちだけど、
あたり
異世界生活を
満喫します

シンギョウガク
イラスト ネコメガネ

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_rebuild.html